

伊豆分場だより

第 3 8 2 号

目 次

巻 頭 言

漁業の過去と現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

調査研究から

2025年のテングサの作柄について・・・・・・・・・・・・ 2

普及・地域の話

ヒラメ中間育成と放流・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

高校生と園児を対象に水産教室を実施・・・・・・・・ 6

漁 海 況

白浜の定地水温・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

令和7年4～6月の伊豆半島東岸定置網漁況・・・・ 9

分場日誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

静岡県水産・海洋技術研究所伊豆分場

令和7年7月

巻頭言

漁業の過去と現状

採用で初めて伊豆に来て数ヶ月が経ちました。私の祖父母は千葉県房総半島南端で漁業を営んでいました。私の記憶と祖父母の生活、その暮らしの様子には伊豆地域の漁業との共通点が多いと感じています。ここでは、私の記憶と祖父母の話を書かせていただきます。

祖父は遠洋漁船の機関士として多くの航海を経た後、沿岸漁業に転じました。祖父からは楽しい話ばかり聞いていましたが、一般的には遠洋漁業の仕事や生活は厳しく、祖母から知り合いの中には命を落とした人が何人かいたと聞いています。海を生業とする地域において、遠洋漁業は大きな収入源であり、家族を支える重要な営みでしたが、その反面、常に危険と隣り合わせだと感じました。沿岸漁業を始めた当時の話もよく聞きました。沖に少し出るだけでカツオ、カジキ、アジなど豊富に獲れ、その大きさも今よりはるかに大きかったそうです。私が小学生の頃、祖父がトビウオの刺し網にかかった大きなカジキを見せてくれたことは鮮明な思い出ですが、昔は珍しいことではなかったと当時話していたのを覚えています。

一方、祖母は海女として海に潜り、イセエビやサザエなどを採っていました。現在では地域の海女は減少し、当時の姿や海女さんで活躍している人は少なくなりました。千葉県の海女祭りは、かつて現役の海女たちが松明を持って海に入り祭を盛り上げていましたが、今は海女さんが減ってしまい、数年前から地域の人も減ったことでボランティアを募り行われています。

祖父母の話から、漁業現場がいかなる環境で、どのような生活の中で営まれてきたのかを知ることができました。伊豆地域でも、採貝藻漁業、沿岸漁業、一本釣り、定置網など、房総半島と似た漁業が行われており、両地域とも豊かな海の資源を生かして家族の生活を支えてきたと思います。

しかし、房総半島と伊豆地域の現状の共通の課題として、環境変化や資源の減少に伴う漁獲量や収入の不安定化が進み、漁業だけの生活は困難になっています。加えて人口減少や少子化、そして後継者不足が深刻です。若者が漁業に就くことが減り、高齢化が進む中、継続は難しい状況です。

祖父母の話す昔の漁業の記憶は、当時の漁場環境や漁業を知ることができる話でした。祖父の話の聞いていると、そんな時代が本当にあったのかと驚かされるほど豊かな資源が存在したことを実感させられます。今後は現在の漁業を知るだけでなく、漁業者の方々と交流しながら、静岡県伊豆地域の漁業の過去についてさらに学び、今後の漁業へつなげられればと思っています。

(伊藤結花)

2025年のテングサの作柄について

伊豆分場では、伊豆半島のテングサの作柄を予察するために、2025年3月上旬から5月下旬にかけて、稲取地区から田子地区にかけての計10地区、29か所でテングサの生育状況を調査しました。調査は、潜水によりテングサの着生面積及び密度を観察し、各漁場内の平均的と思われる場所1㎡のテングサ重量と藻長の測定を行いました。各地区のテングサ生育状況と作柄予察は以下のとおりです。また、漁場ごとの着生量と藻長を表1に示しました。

稲取：(2025年：平均着生量1,088g、平均藻長17.6cm 2024年：平均着生量763g、平均藻長16.6cm)着生量増加、藻長は前年並み。モク類が大きく減少。前年よりも増加と予想される。

谷津：(2025年：1,933g、19.2cm 2024年：1,317g、20.3cm)着生量は増加、藻長は前年よりも長い。前年よりも増加と予想される。

白浜：(2025年：1,305g、15.0cm 2024年：1,940g、18.8cm)着生量は減少、藻長は前年よりも短い。石灰藻の着生量、着生範囲が増加している。前年より減少と予想される。

外浦：(2025年：1,860g、12.8cm 2024年：2,240g、17.7cm)着生量はやや減少、藻長は前年よりも短い。やや減少と予想される。

須崎：(2025年：1,990g、17.5cm 2024年：1,790g、20.5cm)着生量はやや増加、藻長は前年よりもやや短い。中間では、石灰の付着したテングサが多く観察された。前年並みと予想される。

下流：(2025年：1,267g、15.2cm 2024年：2,047g、17.1cm)着生量は減少、藻長は前年よりもやや短い。イギス類の着生が広範囲に見られた。前年より減少と予想される。

仁科：(2025年：1,215g、14.5cm 2024年：1,430g、14.9cm)着生量はやや減少、藻長は前年並み。前年よりやや減少と予想される。

田子：(2025年：782g、12.7cm 2024年：913g、14.0cm)着生量はやや減少、藻長は前年並み。前年よりやや減少と予想される。

小下田：(2025年：600g、7.9cm 2023年：1,620g、11.0cm)着生量は減少、藻長は前々年よりも短い。前々年より減少と予想される。

小土肥：(2025年：50g、8.8cm 2023年：1,630g、13.6cm)着生量は減少、藻長は前々年よりも短い。前々年より減少と予想される。

以上の結果、各地区の作柄は、やや減少または減少の地区が多い(10 地区中 7 地区)こと、主産地の仁科、小下田、小土肥で減少と予想されたことから、2025 年のテングサ作柄予察は「漁場によって着生量に増減が見られるが、県全体としては、減少。」としました。

表 1 テングサ作柄調査結果

地区	漁場名	2025 年			2024 年			2025 年 作柄予察 (前年対比)
		着生量 (g)	平均藻長 (cm)	水深 (m)	着生量 (g)	平均藻長 (cm)	水深 (m)	
稲取	沢尻	1,650	19.9	7.5	200	11.6	3.7	増
	造船場下	1,240	26.9	9.0	675	13.8	6.3	
	藤三港	210	9.2	2.7	1,175	19.3	8.8	
	見高境	1,250	14.4	5.9	1,000	21.7	9.5	
谷津	ハツロウ	2,060	19.9	6.4	1,000	16.9	8.5	増
	千足島浦 (稲取側)	1,800	21.0	5.1	1,500	24.9	7.8	
	千足島浦 (下田側)	1,940	16.8	11.6	1,450	19.2	4.5	
白浜	釜の下	1,710	17.0	2.5	1,600	19.3	2.5	減
	板見増殖場	900	13.0	7.2	1,340	17.5	6.9	
	八代	-	-	-	2,540	20.1	2.5	
外浦	釜の浦	1,860	12.8	2.3	2,240	17.7	2.5	やや減
須崎	イケンダ	2,080	20.4	6.3	1,340	24.9	8.0	やや増
	中間	1,900	14.6	2.3	2,240	16.0	5.2	
下流	ブダイモ	1,200	17.9	4.8	2,520	18.1	5.0	減
	オヨジマ	700	13.7	6.3	1,800	16.0	7.0	
	二つ根岡側	1,900	13.9	5.4	1,820	17.1	5.5	
	イノジマ沖 ^{※1}	-	-	-	-	-	-	
仁科	浮島 (ショウジ)	1,800	19.5	5.5	2,140	16.2	8.0	やや減
	浮島(段)	1,420	14.6	2.8	2,470	15.1	3.5	
	南浜場	640	11.3	3.1	500	10.6	4.0	
	セバマ	1,000	12.5	2.7	40	11.2	2.0	

田子	シケンバ	286	12.2	10.6	450	12.3	4.0	やや減
	オヤマ合せ	680	14.6	7.0	1,350	21.8	12.0	
	弁天	1,380	11.3	3.0	1,050	7.3	6.5	
小下田 ^{※2}	小峰	1,700	9.2	3.3	2,230	14	8.0	減
	穴口	400	7.9	5.8	1,350	9.6	6.2	
	丁田	200	7.4	6.4	1,280	7.9	4.4	
	大久保	100	6.9	4.6	1,150	8.8	5.2	
小土肥 ^{※2}	小土肥	50	8.8	6.3	1,630	13.6	5.1	減

※1 2024年調査未実施、2025年は調査を実施したが、テングサが確認できず
 粹取り未実施

※2 2024年調査未実施のため、2023年の調査結果と比較

(角田充弘)

ヒラメ中間育成と放流

4月10日、大熱海漁協管内の熱海及び上多賀において、県温水利用研究センター産のヒラメ稚魚を受入れ、漁業者による中間育成を開始しました(写真1、2)。

今年度の受入尾数は、熱海で1万尾、上多賀で5千尾、受入れ時の平均全長は約38mmで昨年の約28mmと比べて大きめのサイズとなりました。ヒラメ稚魚はそれぞれの地区の漁業者が陸上水槽で飼育し、20日間を経過したところで尾叉長60mmを超えたため、5月1日に熱海、伊豆山、上多賀の3箇所にて約9千尾を放流しました(写真3、4)。



写真1 種苗受け入れの様子



写真2 受け入れ時の稚魚



写真3 20日間飼育した稚魚



写真4 放流の様子

(松浦玲子)

高校生と園児を対象に水産教室を実施

当场では、身近な海に親しむとともに地元の漁業を知ってもらうため、地域の学校等から「水産教室」として研修や体験の申込みがあった場合に可能な範囲で対応をしています。

このうち、5月、6月に対応した地元下田の高校生と園児達を対象とした水産教室の内容をご紹介します。

(静岡県立下田高等学校)

分場だより 388号でも触れていますが、下田の子供達は高校を卒業するとそのほとんどが進学で地元を離れると聞いており、市内の人口構成からも、1度外へ出た場合、若いうちは地元に戻ってくることはほぼ無いだろうと推測しています。

しかし、進学先や社会人になってからの勤務先、それから家族を持って暮らす別の地で自分のふるさとを思い出すことはあるはずです。そこで、ここから外に飛び出す前に下田の海や地域の水産業のことを学んでほしいと考え、研修では、生徒向けの講義（伊豆の漁業の歴史や当场の研究内容）の他に、実物を見る・触る体験を組み入れました。

具体的には「下田が港別水揚量日本一を誇るキンメダイ」の耳石を用いた年齢査定体験（写真1左）と、展示物を使った磯焼けの学習（写真1右）、「磯焼け対策活動として漁業者が採捕するウニ」の観察です。身近な生物あるいはその一部を実際に観察することで、海の生き物に興味を持つだけでなく、地元の漁業に対する理解を深めてほしいと思います。



写真1 高校生を対象に実施した水産教室（研修）の様子

（左：キンメダイの耳石から年齢を推定、右：展示室で下田の磯焼けについて学ぶ）

(下田市立保育所、下田市認定こども園)

当場のある下田市白浜はかつてテングサの一大産地でした。現在は見られなくなりましたが、出荷用にテングサを成形する際、専用の木の樽に干したテングサを入れ、上から人が踏み込む様子を踊りに見立てた「樽ダンス」という言葉があります。

地域に残るこの「樽ダンス」を是非、子供達に体験してもらおうと、分場の調査で得られた乾燥テングサを本物の成形用の樽に入れ、そこに園児が入って踏み固められるよう、樽の外には階段を設置しました。

訪れた園児達は、靴下を通して足裏から伝わるテングサの感触や次第に固くなっていく樽内の様子に歓声を上げていました。この日はテングサを踏み意外にも、テングサを煮出して作ったところてんや、海の生き物に触れるといった体験も用意し、様々な「下田ならではの感触」を楽しんでもらいました。

今回の体験テーマは触感でしたが、五感を使った体験は長く記憶に残ると言われています。園児達が大きくなってからも、下田の水産物を使ったこの体験を覚えていて欲しいと思います。



写真2 未就学児を対象にした水産教室

左：本物の樽に入ってテングサを踏み固める「樽ダンス」体験とテングサの仕分け体験、
右：海藻を食べる魚「ブダイ」の歯を観察し、触れてみる子供達

(松浦玲子)

漁海況

白浜の定置水温

令和7年4～6月の白浜の水温は、平年値と比べて4月は「平年並み」、5月は「やや低め」～「平年並み」、6月は「やや高め」～「高め」で推移しました(表1)。黒潮は、4月はA型からN型へ、5月はN型からB型へ、6月はB型で推移しました。

表1 白浜定置水温の変化(令和7年4～6月)

月	旬	平均(°C)	平年差	前年差	最高	最低
4月	上旬	15.7	0.3	-0.4	16.8	13.7
	中旬	16.1	0.2	-1.2	17.0	15.5
	下旬	16.5	-0.1	-1.7	16.7	16.3
	平均	16.1	0.2	-1.1	17.0	13.7
5月	上旬	17.6	0.3	-0.5	17.9	17.3
	中旬	17.1	-1.0	-1.3	18.9	15.4
	下旬	18.8	-0.2	-0.4	20.5	17.1
	平均	17.8	-0.3	-0.7	20.5	15.4
6月	上旬	21.1	1.1	0.4	21.5	19.9
	中旬	21.3	0.8	-0.3	23.5	19.4
	下旬	22.5	1.8	1.0	24.0	20.9
	平均	21.6	1.2	0.3	24.0	19.4

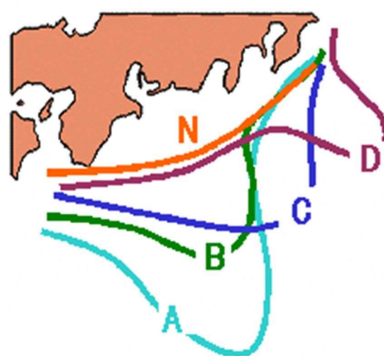


図1 黒潮流型

※水温の平年偏差の目安

かなり低め: ~-2.5°C、低め: -2.4°C~-1.5°C、やや低め: -1.4~-0.5°C

平年並み: ±0.4°C、やや高め: 0.5~1.4°C、高め: 1.5~2.4°C、かなり高め: 2.5°C~

(松浦玲子)

令和7年4～6月の伊豆半島東岸定置網漁況

(1) 月別漁獲量

伊豆半島東岸大型定置7か統（伊豆山、古網、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津）における令和7年4～6月の月別漁獲量は表1のとおりでした。

表1 伊豆東岸定置網の月別漁獲量

月	漁獲量(t)	前年比	平年比
4月	343	0.37	0.80
5月	570	1.31	1.22
6月	436	0.91	1.13
合計	1,349	0.87	1.05

(2) 魚種別漁獲量

多獲された魚種の月別漁獲量と主な漁場は表2のとおりで、マルソウダ、さば類、マアジが多く漁獲されました。

マルソウダは5、6月に漁獲量が多く、特に5月は前年、平年を上回りました。さば類はゴマサバ主体で、いずれの月も多く漁獲され、特に6月は前年、平年を上回りました。マアジはいずれの月も多く漁獲されましたが、前年を下回りました。

表2 各月の上位5魚種の漁獲量と主な漁場

月	順位	魚種名	漁獲量(t)	前年比	平年比	主な漁場
4月	1	ブリ	129.0	0.38	1.39	北川、谷津、川奈
	2	マアジ	88.2	0.66	0.79	伊豆山、古網、川奈
	3	マイワシ	30.3	0.09	0.63	伊豆山、古網
	4	さば類	25.6	0.74	0.41	北川、赤沢、川奈
	5	サワラ	18.9	6.79	2.18	富戸、川奈
5月	1	マルソウダ	282.4	1.82	5.58	北川、古網
	2	マアジ	91.5	0.70	0.96	古網、川奈、伊豆山
	3	さば類	75.6	2.23	0.58	北川、赤沢、川奈
	4	ブリ	30.1	0.50	1.05	川奈、富戸、北川
	5	ヒラソウダ	13.9	624.93	12.18	伊豆山
6月	1	さば類	164.1	4.56	1.48	赤沢、北川
	2	マアジ	70.5	0.85	1.27	伊豆山、古網
	3	マルソウダ	55.0	0.17	1.18	川奈、富戸、北川
	4	マイワシ	45.0	32.18	1.74	古網、伊豆山
	5	カタクチイワシ	27.3	105.67	0.59	古網

(鈴木勇己)

分場日誌 (令和7年4月-6月)

4月8日	テングサ作柄調査(谷津)	5月13日、 14日	イセエビ測定(田牛)
4月9日	テングサ作柄調査(下流)	5月13日	テングサ作柄調査(仁科)
4月9日	アワビ測定(稲取)	5月16日	県漁業士会役員会(静岡)
4月10日	ヒラメ種苗受入れ(大熱海)	5月17日	黒船祭記念式典(下田)
4月11日	テングサ作柄調査(土肥)	5月19日	伊豆地域栽培漁業推進会議(伊東)
4月16日	下田市共同漁業権運営委員会 (下田)	5月19日	キンメダイ資源評価担当者検討会 (Web)
4月22日	県定置漁業協会理事会・役員会(伊 東)	5月23日	下田高校研修対応(場内)
4月30日	テングサ作柄調査(田子)	5月28日 -29日	マダイ沖だし(網代、田子)
5月1日	ヒラメ大熱海種苗放流(熱海)	6月11日	下田認定こども園見学(場内)
5月1日	イセエビ測定(下流)	6月16日	下田保育所見学(場内)
5月8日	イセエビ測定(田牛)	6月24日	東部地区漁業士会役員会(稲取)
5月13日	伊豆・いとう地魚王国総会(伊東)	6月27日	マダイ中間育成巡回指導(網代、 田子)

令和8年4月6日発行

発行 静岡県水産・海洋技術研究所伊豆分場
下田市白浜 251-1 (〒415-0012)
TEL <0558>22-0835 (代)
FAX <0558>22-9330
<https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/izu>
E-mail:suigi-izu@pref.shizuoka.lg.jp
編集 伊 豆 分 場